

うちすて



銀座商店街幻想

闇の中をとぼとぼと歩いているとそれはひょっこりと現れる。

入り口には看板が掲げられており最初の二文字は判別できぬが、あとは錆びたような字で銀座商店街と書かれている。

様々な店が立ち並んでいるのだが、果たしてこれが店なのかと問われれば答えに窮してしまう。商店街と銘打っている以上は店なのだろうけれども、気狂いの作品展ともつかぬものもばかりだ。

例えば三段の棚に面をかぶった猫が整然と並んでいる店がある。天狗に火男、般若に悪尉、みなそれぞれ違った面をつけ正面を向いている。その猫どもは皆背筋をしゃんと伸ばし、動かない。剥製ではないかと思ってしばらく見ていると僅かに尾や耳を動かすのである。

店主と思しき男は狐面で宮司のような出で立ちである。この男もまた奥に座って背筋をしゃんと伸ばし、動かない。

また別の店では暗闇にポツンと手だけが浮いている。店の中はまるで見えず、白い女の手だけが手招きをしているのだ。

しばらく歩くと木の格子の向こう側で着物姿の女郎が座っている。後ろを向き艶っぽいうなじを覗かせているのだが、いつも顔を見ることができない。

向かいには皮を売る店がある。店頭には手袋と銘打った人の手の皮がぶら下がっている。

古びた地蔵やら卒塔婆で雑然とした店、碧い金魚が並ぶ店、深い穴のある店。

早くここを出なければと足を速めるのだが出口は一向に見えぬ。ならばと思って振り返ってみても入ってきたはずの入口が見えぬ。

店と店との間は隙間などなく、どこにも抜け道はない。店先の老翁が快活に笑い出す。どこぞで犬が吠え出す。何かが軋む音がする。眩暈がする。

目覚める。

夢だ。

毎度これで最後にしてくれ思うのだが、何度も見るあの夢だ。

恐らく何か買うまでは見続けるしか無いのだろう。

だが、あそこのものを買ってしまったら、何かよくないことが起こりそうな気がするのだ。